

ドイツにおける歴史の政治のための覚書

Notizen zur Geschichtspolitik in Deutschland

中尾 健二
NAKAO Kenji

0. はじめに

古来から歴史が政治の対象であったり、その一環であったこと、それどころか歴史が政治をささえてきたこと、これらは自明の理であるのかもしれない。多かれ少なかれ、政治的支配は自己を正当化する来歴を語りたがるからである。しかし同時に、歴史が世俗の有為転変を超越的な視点から眺め、これを批判的に記述してきたことも、この歴史の伝統に属する。

ヘーゲル以降、歴史は学問として制度的に自立して研究されるものへと姿を変える一方で、政治的実践を正当化する論拠を供給する水源ともなった。両者とも古来からの伝統に則りつつ、その論議の方法を洗練させたと評価できるかもしれない。

しかし、90年代のボスニア内戦では、それぞれの勢力が相手への敵意を煽るために歴史を動員し、ときには敵の図書館を破壊し、詩人を暗殺するまでにいたった。マルクス主義の世界史講義がひどく評判を落とした後に、〈国民の歴史〉の宣伝が声高にはじまったのである。イデオロギーか余暇の楽しみ、あるいは学問の世界の営みと思っていたものが、突然血なまぐさい様相をおびて、政治的にアクチュアルなものとして回帰してきた。こうした出来事は、われわれにある連関についての、すなわち政治と歴史の連関についての意識をあらためて敏感にさせるものであった。

日本とドイツは、最近の過去をいかに総括しているかについて、国際的な注目をあびてきた。ともに第二次世界大戦をファシズム体制の下で戦って敗れ、その荒廃から立ち上がって経済大国にまでのし上がったことから、比較対照されて考察されることもしばしばである。最近の過去をいかなる歴史として語るかが、両国の現在ならびに将来の国際的地位を定めるであろうし、またそうした対外的な事柄にとどまらず、いかなる国民的なアイデンティティを形成するのかという、それはすぐれて主体的な事柄でもある。(1)

ドイツにおいては、90年代以降かつての戦争の惨禍を想起させる、とりわけナチス・ドイツによるユダヤ人迫害を想起させる施設（ミュージアム、記念碑、追悼碑、警告碑など）の建設が顕著になった。こうした施設は、そもそもその建設が立法・行政と世論の抗争と協働の結果としてある。また出来上がってからは、その施設を訪れる人びとの経験を一定の方向に組織化するという意味でも、この抗争と協働が日々繰り返かえされているともいえよう。(2)

本稿は、こうした施設を手がかりとして、戦後ドイツにおける「歴史の政治」を考察する、そのための準備的・断片的な覚書である。

1. ホロコースト警告碑

2005年5月にベルリンの目抜き通りウンター・デン・リンデンに面した高級ホテル「ア

ドロン」裏の敷地に「殺害されたヨーロッパ・ユダヤ人のための追悼碑」(Denkmal für die ermordeten Juden Europas)、いわゆるホロコースト警告碑(Holocaust-Mahnmal)が完成した。当市のシンボルであるブランデンブルク門に隣接し、したがって連邦議会のあるライヒスタークからも間近である。面積19,073 m²の敷地に墓標(Stele)を模した、さまざまな高さのコンクリートの立方体が2,711個立っている。重さは平均8トンだそうである。1988年にジャーナリストのレア・ロシュによって建設の呼びかけがなされ、ヴィリー・ブランドやギュンター・グラスなどが支持を表明、設計はニューヨーク在住の建築家ピーター・アイゼンマンの案が1998年に当時のコール首相によって採用されたものの、紆余曲折あり、論争ありで完成にいたるまで20年近くを要し、その間政権はコールからシュレーダーに変わった。保守から社民、緑の党を貫くプロジェクトであったわけである。(3) [写真11]

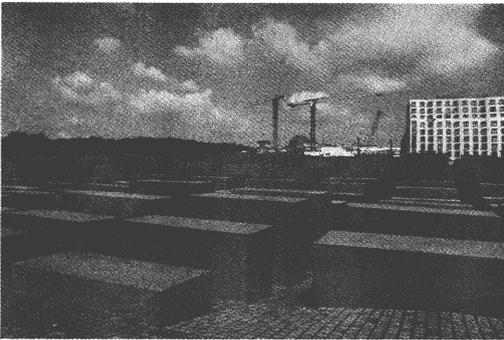


写真11

その可能なかぎり具象性をそぎ落とした佇まいは、ホロコーストという未曾有の、そして筆舌につくしがたい(再現前化不可能な)出来事と張り合おうとするものであるが、私は完成前の模型からはドミノ倒しをどうしても連想してしまった。今回実際に訪れてみると、巨大迷路をもった公園がそこに出現したかのような印象をうけた。たしかにこれは、正真正銘のテーマパークであるのかもしれない。いかにも子供たちが鬼ごっこや隠れんぼをしたくなるような空

間でもあり、SF映画ファンなら『2001年宇宙の旅』に出てくるモノリスが集団で出現したかのように感じるであろう。こうした建築物は、設計者や建造者の意図をはなれて、多様なつきあい方を許容する。芸術がその創作において自由でなければならないとすれば、その享受においてもそうであるにちがいない。

しかし、とりあえず「つきあい方」を回路づけるために敷地内には「墓標領域訪問者規則」というプレートが、いささかとってつけたかのように埋めこまれている。いわく「この墓標領域は原則として徒歩でのみ、そして歩くテンポで横切ってもよい」とか「犬連れ」や「騒音、大声、楽器の使用」は「許されていない」などなど。これがたんなるお題目でないことは、8月に起きたあるエピソードからうかがえる。

それを地元紙ベルリナー・ツァイトゥング 8月11日号が「マスタードつき想起」ホロコースト警告碑わきにソーセージ屋台、怒りをよぶ市議ドゥブラウが撤去を計画」という見出しで写真をつけて報じている。ユーリア・ハークの署名がある、その記事の冒頭は「ソーセージはおいしい。そのことが問題になっているわけではない。難問を投げかけているのは、そのソーセージが食べられる場所、ホロコースト警告碑のわき、案内所の向かいであることである。殺害された数百万のユダヤ人に思いをいたすところに火曜日からカレー・ソーセージ屋台が建っている。」とはじまっている。ホロコースト警告碑の東側には道路をはさんで、ちょっとした空き地があり、これは私有地だそうであるが、そこに伝統的なドイツの木組みの家屋を模した屋台が出現し、そこそこの商売を営みはじめたというわけなのである。しかし、翌日の同紙にはもう移動用車輪をつけられた屋台の写真つきで「マスタードぬきの想起」市議ドゥブラウが屋台をホロコースト警告碑から追いはらう」という記事(トールキット・トライヒェル署名)がのった。

私が訪れた16日には、すでにソーセージ屋台は跡形もなく、ベルリン名物のカレー・ソーセー

ジの香りすらなかったが、かわりに土産品を売るテント掛けの店が出ていた。この程度は許容範囲ということなのか、それともゆくゆくは撤去されることになるのか。建造者は、ここを訪れる人びとに「厳粛さ」を要請したいのだろうが、こうした「意味されるもの」が一義的に定まらない作品は、否応なくその解釈が解釈者の手にゆだねられてしまう。それでいいのだろう（だからこそ、多くの訪問者を引き寄せているともいえる）。私はアイゼンマンのデザインはあとう限りホロコーストという出来事と拮抗しようとしているように思う。ただし、これはあくまで「私の」解釈ではある。

しかし、「訪問者規則」はゲームのルールであって、テーマではない。回路づけの最大の仕掛けは、この地下に設けられたミュージアムであって、そこでは1933年から45年にいたるドイツによるユダヤ人の迫害と殺害の歴史を概観する展示がなされている。[写真12] そこに入場するには、極右の攻撃を警戒してか二重のボディチェックがあって、いささかもものしいのであるが、私が訪れた二日ともドイツ人および近隣各国からの訪問者が列をなしていた。[写真13] 強いてこの展示に特徴的な点をあげるとすれば、犠牲となった人びとひとりひとりに、またその家族に目を向けさせようとしているところであろう。展示室のひとつは、全体の照明をおとし、犠牲者の手紙などのテキストに淡い照明を裏側からあてて浮かびあがらせ、さらに犠牲者の名前と略歴を読みあげるアナウンスが静かに流される。すべての犠牲者を読みあげ終えるには、6年と数ヶ月を要する旨のコメントがある。(4) 周囲の壁には、各国ごとの犠牲者の数が示されている。たとえばもっとも多いのがポーランド人で、290万人から310万人とある。当時ポーランドに住んでいたユダヤ人（とナチスによって規定された人間）は、ほとんど抹殺されたことになる。[写真14]

欧米のドキュメンタリーでは、ある過去の出来事を写真、実写フィルムを編集して概観させ

ると同時に、関係者のインタビュー（個人の生活史に織りこまれた記憶の断片）をそれと同じ、ないしそれ以上の重みで配置する構成が通例であるが、それが空間化されているといった印象をうけた。とはいえ、ここには生き残りの証言はなく、死者からのテキストばかりではある。

地上と地下は、好意的にいえば相互補完的に、意地悪くいえば奇妙なズレをともなって共存し



写真12



写真13



写真14

ている。ふつう墓の下には死体か骨が埋まっているものだが、ここではミュージアムという形をとって写真とテキストが埋まっている。訪問者はさながらオデュッセウスの冥府行のように地下への階段を降りていき、死者との対話を強いられる。かれら死者たちがわれわれに伝えている最大のメッセージは、いったい何であろうか。それは訪問者ひとりひとりが考えればいいことだが、われわれが冥府に誘われるのは、やはりそこに「君たち生者は過去から自由にはなれない」という声が響いているからにちがいない。むろん、そこは居心地のよい過去ではない以上、エロティックな退行への誘いではなく、反省能力を動員せよ、という呼びかけなのであるけれど。

2. 「自虐」という言葉

昨今の日本では、戦時下の日本軍の蛮行を取りあげると、「自虐的」と一部の人びとから攻撃されることになる。この戦争にかかわって、ということは日本軍にかかわってということだが、アジアで千万単位の人間が命をおとしたにもかかわらずだ。そうした人びとの歴史観自体の批判的吟味はさておいても、この「自虐的」という言葉にはひどく違和感を感じてしまう。この言葉が成立するためには、現在のわれわれが、当時の戦争を遂行した指導部およびその実行者と一体であり（でなければ、「自」虐になりようがない）、なおかつその戦争遂行は正しかった、細部にいたるまで正当化されると仮定しなければならぬ（でなければ、自「虐」になりようがない）。前者は心理的同一化であり、後者は倫理的正当化であるが、こんな途方もない全体化理論が成立するであろうか。*

*たとえば、私が731部隊を非難・告発するとしよう。告発の対象はその関係者であり、批判的となるのは倫理的尺度に照らしたその行為である。これは戦争そのものについての倫理的判断を留保しても可能である。さらに戦争そのものについて

も、倫理的判断を留保してその政治的、経済的側面から追跡・調査・研究することは可能である。

心理的同一化を保証するために戦争の歴史全体がメロドラマ化される。感情移入可能なものに仕立て上げる以外に一体性を保証することができないからである。「歴史は物語でよい」という主張や、小林よしのりがコミックスを駆使するのは、すべてここからきている。そして倫理的正当化を保証するために、正当化しきれない事実は「なかったこと」あるいは「日本側がやったことではないこと」にされる。南京大虐殺や従軍慰安婦は、正義の戦争を勇敢に戦った英雄的な日本兵というイメージを損なうからである。小林よしのりのコミックスにおける善玉/悪玉の極端に誇張されたイメージ操作は、これを例解しているといえよう。(5)

ところで、ホロコースト警告碑のような施設を首都のど真ん中に建設するような政府と国民は、はたして「自虐的」なのであろうか。極右の連中だけはおもしろくないだろうが、一般にはだれもそんなふうに思っているふしはない。完成早々、あるドイツ人の友人は「これはマストだ、是非見にこい」というメールをくれた。ナチス時代にドイツをはじめ被占領地のヨーロッパ各国の政治犯が、「ドイツ国民の名の下に」(Im Namen des Deutschen Volkes・・・判決文には必ず大きくこう記されていた) 処刑された刑務所跡に建造されたプレッツェンゼー記念館を訪れたときも、バスを降りてうろろうろしていたら、通りかかったおじさんが「記念館かい、この道を行って左だよ」と親切に教えてくれた。どうもかれらは、ドイツがナチス時代に犯した野蛮な行為の足跡が、積極的に保存されていることに誇りを感じているらしいのだ。私がここを訪れたのは8月19日であったが、絞首刑が執行された五つの鉤（なんて低いのだろうか！）が設置された部屋には、萎れかけた花束と若い女性の顔を描いたスケッチが床に置かれていた。そのスケッチの左にはポーランド系の名前(Bronislawa Czubakowska)と亡くなった日付

1942年8月15日とが記されていた。命日に遺族か関係者が訪れたにちがいない。[写真21, 22, 23]加害者側がそのような場をもうけることは、死者に対するせめてものたむけであろう。

過去との取り組みに関して、ドイツを模範と



写真21



写真22

するような言説に対しては、ドイツ人は悪行をすべてヒトラーとその一味のせいにして自分たちを免責している、という議論が日本では散見される。(6) それによって戦後ドイツの過去との取り組みをできるだけ貶め、相対的に日本を免罪しようということだろう。しかし、この議論はきわめて限定された範囲でしか妥当しない。

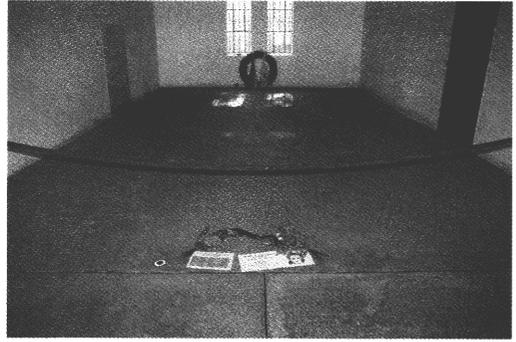


写真23

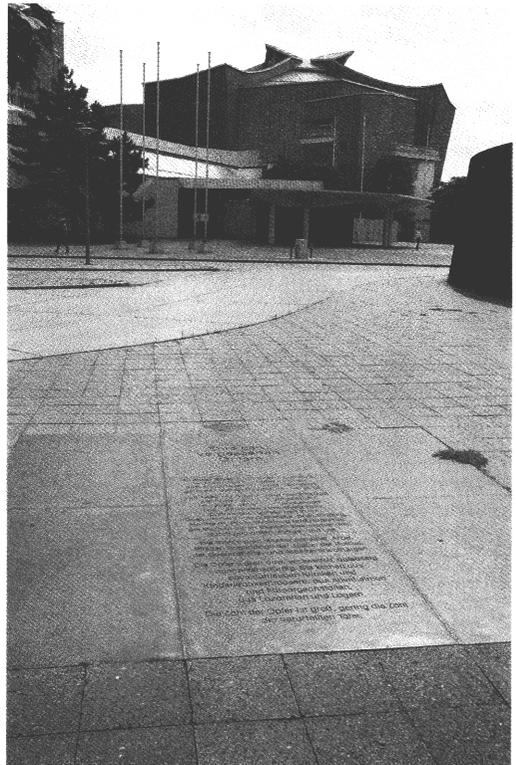


写真31

その範囲とは、一般市民の心理的防衛機制としては、たしかにそのような傾向を指摘しうるかもしれないということである。それを別とすれば、ナチス体制、とりわけホロコーストと当時のドイツのさまざまな社会的セクターとの関わりは、とっくの昔から問題とされ、議論されてきた。たとえば、強制収容所システムへのドイツ大企業やドイツ鉄道の関与、ホロコーストへ先鞭をつけた、約20万人が殺された精神障害者「安楽死」作戦（いわゆる T4 作戦）への精神医

学、司法、行政の関与などである。後者については、「忘れられた犠牲者に名誉を」というプレートが、あのベルリン・フィルハーモニー前の敷地（ティーアガルテン4番地）に埋めこまれており、それは「犠牲者の数は多く、有罪を宣告された犯人は少ない」と怒りをこめた文章で終わっている。[写真31] さらにアイヒマン裁判などであぶり出された官僚制ないし官僚的メンタリティとナチス体制との共犯関係も忘れることはできない。そして、そもそも国民の一定の支持なくしてナチスは政権掌握にいたらなかったわけであるから、ヒトラーとその一味を悪玉にして事足りるとするわけにはいかないことは、いくばくかの反省能力をはたらかせれば明らかなことである。

心理的防衛機制のもう一方は、「善いドイツ人」との一体化である。これによって「悪いドイツ人」とのかかわりから逃れることができる。シュタウフェンベルク大佐らがヒトラー暗殺を企てた7月20日事件やゾフィー・ショルらの「白ばら」抵抗運動などのドイツ人によるナチス体制への抵抗（Deutscher Widerstand）が過度に強調されるとすれば、そうした心の動きを推定せざるをえないが、これが不正な支配一般への抵抗を鼓舞する方向で受けとめられるのならば、まったく健全というものだろう。日本ではこうした「善い日本人」を見つけようとし、ということとは「悪い日本人」を見つけようとし、ということであって、これによって戦争遂行を全体として正当化するか、戦争一般を否定する抽象的平和主義かの対立が長く日本の戦後を支配してきたのである。

3. ノイエ・ヴァッヘ

小泉首相がその参拝にこだわっているのも、靖国神社問題が再燃している感があるが、戦争遂行の主要な機関（イデオロギー部門担当）に「不戦の誓い」をしに行くというのも、参拝と発言の両方をまじめに受けとれば、遂行的矛盾

（「私はここにいない」）を犯しているようにどうしても感じてしまう。憲法上は一宗教法人、事実上は国営宗教の靖国神社にかわって、国立の新たな追悼所を建設するという意見もあるようだが、かりにそのようなものが建設されたとしたら、どのようなデザインと内容になるのだろうか。

1993年からベルリンのウンター・デン・リンデン通りに面したノイエ・ヴァッヘには、その反戦的な作品で著名な画家・彫刻家ケーテ・コルヴィッツ（1867-1945）の「死んだ息子を抱く母親」像（1937）が拡大・複製されて据えられている。農婦のような年配の女性が若い裸の男性の眼を蔽うように抱いている。彼女自身第一次世界大戦で息子を亡くしている。その無念の思いに形を与えたものであろうし、それがキリスト教美術の伝統的なモチーフであるピエタ像の現在化にもなっている。[写真41, 42]

じつはこのノイエ・ヴァッヘ（Neue Wache）は、

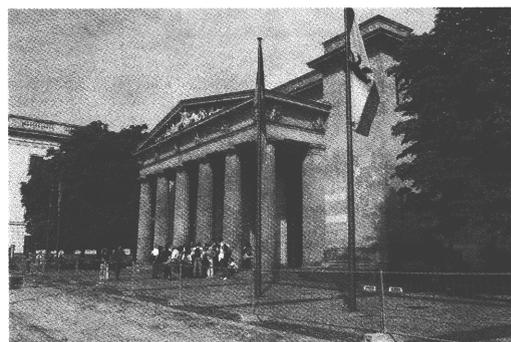


写真41

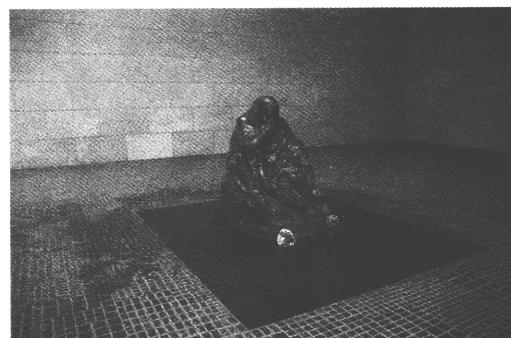


写真42

建築家シンケルが設計し、もともとその名のとおり1818年から1918年までプロイセン王宮護衛所として利用されていた。その後の有為転変は省くとして、これが1993年からはドイツ連邦共和国の正式の国立追悼所となった。コール政権下でのことである。それにともなってコルヴィッツの像が据えられたのである。この像の足下の碑銘には「戦争と暴力支配の犠牲者に」(DEN OPFERN VON KRIEG UND GEWALTHERRSCHAFT)とある。追悼の対象はこれによって、戦没兵士から民間人死者へ、そして「暴力支配」とは第一にナチス体制であるから、それに抵抗して殺された政治犯、組織的に殺されたユダヤ人、シンティとロマ、精神障害者、同性愛者などへと拡大されたことになる。しかし、この碑銘だけでは「誰が誰を悼むのか」なお無限定なところがある。この無限定なところとコルヴィッツの像が放つ心情(母親が息子を悼む心情=私情)とが奇妙に重なってしまいかねない。国家が私情を搾取してはなるまいとも思うし、私情が公共化するためにはなんらかの変換器が必要とも思う。

とはいえ、この施設の入り口には銅版に追悼文が刻まれて掲げられている。ある程度限定はなされているのである。追悼の主語は「われわれ」である。国立の施設であるから、この「われわれ」はドイツ連邦共和国の政府と市民であるだろう。そこには「われわれは、幾百万の殺害されたユダヤの人びとに思いをいたす。殺害されたシンティとロマの人びとに。血統や同性愛の故に、あるいは病気や身体の弱さの故に殺されたすべての人びとに」「われわれは、暴力をこ抵抗し、その命を犠牲にした女たちや男たちに思いをいたす。われわれは、良心を曲げるよりは、むしろ死を受け入れたすべての人びとを讃える」などとある。軍隊や警察といった殺した人びとから、かれらによって殺された人びとへ視野を転換していることは明らかである。

では、靖国神社にはどんな追悼文が掲げられているのだろうか。もともと「言挙げせぬ」国

ゆえに、そんなものはないのだろうか。設立趣旨のまま「官軍の戦死者」だけがあいかわらず祀られているのだろうか。では、たとえば兵士であっても、脱走して殺された兵士とか、軍隊に嫌気がさして自殺した兵士とか、飢餓の戦場で同僚の兵士に食われた兵士はどうなんだろうか。そういう兵士たちは排除されているのか、それともみんな「名誉の戦死」ということで祀られてしまったのだろうか。そして、そもそも日本兵が殺した人びとのことはどうなっているのだろうか。

政教分離原則をみとすために、靖国神社にかわる国立の追悼所ができるにせよ、それが靖国神社のような内向きで自己中心的な、兵士としての死を礼賛する内容をひきつぐのだとすれば、それは外からの批判を回避するだけの欺瞞でしかない。

4. 図書館

1933年5月10日にナチスに賛同する学生たちが、ベルリンのベーベル広場で数百人におよぶ著述家、ジャーナリスト、哲学者、研究者の書物を燃やした。有名なところでは、トーマス・マン、エーリッヒ・ケストナー、ジークムント・フロイトらの著作が燃やされた。宣伝大臣ゲッベルスは「過ぎ去った共和国精神のいしずえを地の底に葬った」と演説したそうである。この広場は国立オペラ座とフンボルト大学法学部の間にあり、ウンター・デン・リンデンをはさんでフンボルト大学本部と向かいあっている。今ではそこにミハ・ウルマンの『図書館—1933年5月10日の焚書記念碑—』(1995年完成)と名づけられた作品が建造されている。傍らに埋めこまれた銘板には、1820年にハインリッヒ・ハイネが書いた「これはプロローグでしかなかった。書物が燃やされる場所では、最後には人間も燃やされるのである」という文章がそえられている。[写真51, 52, 53]

かなり広い広場のほぼ真ん中の地面に1メー



写真51

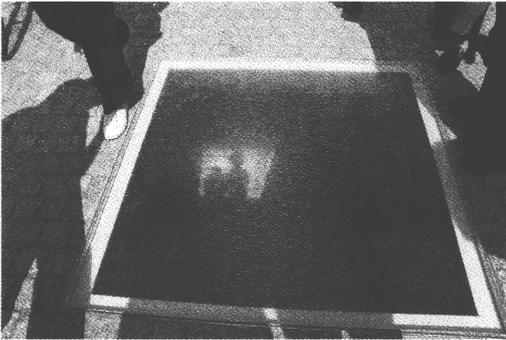


写真52

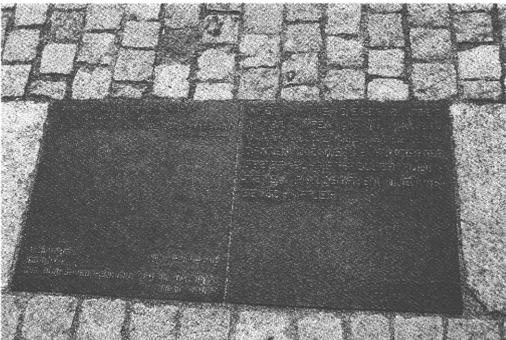


写真53

トル四方のガラス板が設置されていて、そこから下を覗きこむと、ガラス板の汚れや曇りではっきりとではないものの、地下のスペースに白い空の書架が、ガラス板に映りこんだ自分の影や空とともに見える。この地下室は、深さが5 m 30cm、その四方に棚が14段ある書架がつくられており、約2万冊の本が入るとのことである。これは焚書で燃やされた冊数に相当する。

ところで、焚書はナチスの発明品ではない。この日本語自体が中国の故事に由来しているし、

近いところでは第一次世界大戦中にアメリカでドイツ系の書物が焼かれたりもしている。日本では特高が赤い表紙の本さえ見咎めた、というエピソードがある。われわれがこうした行為におぞましさを感じるのは、それが近代社会の前提条件を破棄して、宗教戦争や異端審問の時代に逆行するものだからである。いや、20世紀に起きたのは、信仰や思想信条ゆえばかりではなく、人種や病気といった本人が責任の負いようがない事柄ゆえに殺されたわけだから、それ以上に惨いことであつたともいえよう。さらにそうした行為が強権的な国家権力によってばかりではなく、それによって組織された大衆運動によって—それも当時のドイツの大学生といえれば知的エリートであろう—なされたことがますますおぞましさを増大させるのである。ミハ・ウルマンの『図書館』は、由緒あるオペラ座と大学に囲まれた広場に穴をうがって、「ここを覗きこめ」と、つまりそこは文化が燃やされた場所でもあることを心に刻めと促している。本が一冊もない『図書館』を覗きこむと、どうしても自分の影が映りこんでしまうのだが、「君はこの共犯者にはならないか」と問われているような気分になるのである。

5. グルーネヴァルト駅17番線

ベルリンの中心部からポツダム方面へ向かう電車によって20分あまりでグルーネヴァルト駅につく。高速道路が線路と平行して走っているものの、森と閑静な住宅地に囲まれた長閑な駅である。[写真61] じつはここに1998年ドイツ鉄道株式会社によって、ひとつの記念碑が建造された。ナチス政権下ユダヤ系のベルリン市民は、この駅からテレージエンシュタットやアウシュヴィッツといった強制収容所に送られていった。そのとき使用されたのがこの17番線であり、現在では廃線となっているそのプラットフォーム全体が記念碑として保存されているのである。電車からおりて、駅舎への連絡路を



写真61

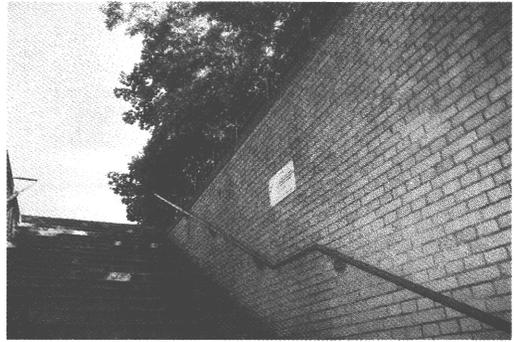


写真63



写真62



写真64

歩いていくと「17番線」と記された大きなステッカーが下がっている箇所がある。[写真62] その階段を上っていくと途中で以下のようなプラカードが掲示されている。[写真63]

17番線

1941年から1945年までドイツ鉄道の列車によって死の収容所に強制移送された人びとを想起するために
1998年1月27日
ドイツ鉄道株式会社建造

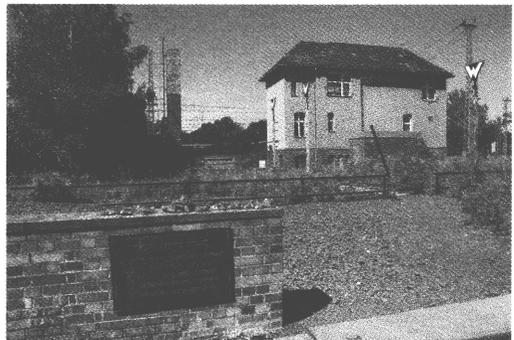


写真65

プラットフォームに上ると、線路をはさんで両側にユダヤ系市民が移送されたその日ごとにほぼ1m×3mの鉄板一枚が当てられ、それらがホームに敷きつめられている。たとえばその一枚には「9.12.1942 / 1000 JUDEN / BERLIN - AUSCHWITZ」と鉄板に浮き彫りにされている。最後の一枚は「27.3.1945 / 18 JUDEN / BERLIN -

THERESIENSTADT」である。[写真64] プラットフォームを突端まで歩いていくと、そこにも銘板が設置されている。タイトルのヘブライ語は私には読めないが、本文はドイツ語で「1941年10月から1945年2月まで、ここからナチの死刑執行人によって死の収容所に強制移送され、殺害された、数万人のベルリン・ユダヤ系市民を想起するために」と書かれている。[写真65] これが、いつ、だれによって設置されたのかは不明であるが、ホーム上の鉄板には45年3月27

日までの日付が刻印されており、おそらくこの情報の方が新しいと推測される。ドイツ鉄道は、自らの前身が実行したユダヤ系市民の強制移送に関する記録を発掘・調査しうる立場にあるからである。

この駅が一般に知られるようになったのは、クロード・ランズマン監督の9時間をこえるドキュメンタリー映画『ショア』(1985)からではないだろうか。かれは当時ベルリン在住で地下にもぐって生き残った女性インゲ・ドイチュクローンを、イスラエルからわざわざ連れてきて、この駅のベンチに座らせてインタビューしている。彼女は「ユダヤ人狩のあったときは、ベルリン市民はそそくさと帰宅してしまい、街はひっそりしていた」「ここは、もう私の国じゃないわ、ドイツ人たちは何も知らなかったなんていいだす始末ですもの」といったようなことを語る。同胞を奪われた孤独感と生き残ったことへのやましさを吐露する彼女の涙ぐむ顔のクローズアップで終わるインタビューには、中心街方向へゆったりと走っていく黄色と赤に塗られたSバーンの電車のロングショットが挿入されている。ここに連れてこられたユダヤ系ベルリン市民たちは、自分が二度と帰ることができない、その平和な日常へ帰っていく電車を、どのような思いで見送ったのだろうか。

『ショア』が『17番線』の建造に影響を与えたかどうかは定かではない。ただドイツ鉄道なしには、大量殺戮システムが稼働しなかったことだけは確かである。ドイツ鉄道株式会社は、戦後半世紀以上たつて、その過去をはっきりと残すことに決めたのだろう。今では廃線となったプラットフォームは、あくまでもひっそりと静まりかえっていて、足下の鉄板の刻印だけが淡々と、かつてあった事実を伝えているばかりである。平和な日常は残酷な破局と背中合わせになっているのに、想像力をめいっぱいふくらませてもその両極を架橋することはなかなか難しい。ただここが、平和な日常の残酷な破局への転換点だったことだけは確かだ。一枚一枚の

鉄板に刻印された日付と人数と目的地がそのことを静かに告げている。

「文化の記録で野蛮の記録でないものはない」とは、ヴァルター・ベンヤミンの名言であったが、ベンヤミン以降の今、それはこういいかえねばならないだろう、野蛮の記録を遺すことこそ文化の証であると。付け加えねばならないのは、野蛮の記録は野蛮を行ったものの手で記されねば意味がないということである。

[注]

- (1) 国際的な比較の観点から第二次世界大戦後の日・独・伊における記憶の文化を扱った論文集として下記がある。日本からは柳父園近、石田勇治、三島憲一が寄稿している。Christoph Corneliesen u. a. (Hg.): *Erinnerungskulturen – Deutschland, Italien und Japan seit 1945–*, Frankfurt am Main 2003.
- (2) ドイツ全土にわたって、記憶ないし歴史の政治の観点から、これらの施設を扱ったものとして下記がある。Peter Reichel: *Politik mit der Erinnerung – Gedächtnisorte im Streit um die nationalsozialistische Vergangenheit–*, München 1995.
- (3) ホロコースト警告碑をめぐる論争を概観するには、とりあえず下記を参照。Michael S. Cullen(Hg.): *Das Holocaust-Mahnmal – Dokumentation einer Debatte–*, Zürich 1999.
- (4) 犠牲者の個人情報、イスラエルのヤド・ヴァシェム・ホロコースト博物館から提供されている。被害者側と加害者側との信頼関係の証とみることもできよう。(大貫康雄「慎みある自信一何を積み重ねてきたのか」『世界』2005年7月号106頁以下参照)
- (5) 小林よしのりの著書は多数あるが、代表的なものとしては、小林よしのり『新ゴーマニズム宣言 Special 戦争論』幻冬舎1998年。

かれのコミックスの特徴を旧ソ連のコミックスと比較して、全体主義芸術という観点から分析した興味深い考察が、テッサ・モーリス-スズキ『過去は死なないーメディア・記憶・歴史』岩波書店2004年にある。小林よしのりの主張内容についてはきちんと議論すべきだとは思うが、私はその品の悪い情緒過多にまず辟易するところがある。これはまた、ナチスのあるプロパガンダ映画を私に思い起こさせた。そこでは、チェコ

やポーランド在住のドイツ系住民がいかに虐待されているかが情緒たっぷりに描かれているのであるが、これがそれらの国々への侵略の心理的地ならしを企図したものであることは明らかである。

- (6) 最近の事例を挙げておく。川口マーン恵美「日本とドイツ「過去の反省」比較論の愚」『正論』2005年9月号310頁以下。